

# 他者による自己分析を先行させる 自己PR作成支援方法の提案と評価

田中 正信<sup>†</sup> 中村 亮太<sup>‡</sup> 上林 憲行<sup>†</sup>

東京工科大学<sup>†</sup> 湘北短期大学<sup>‡</sup>

## 1. 背景

就職活動に使用する履歴書（エントリーシート）を作成する上で自己分析は重要な作業である。エントリーシートの自己PR文を作成するときの材料であるアピールポイントやそれを裏付けるための具体的なエピソードを発掘するために自己分析が行われる。本研究では作成支援として個人での作成後に学生同士による相互添削を行っているが、文の構成やエピソードの具体性、誤字脱字などの表層的な確認作業に留まり他己分析まで行われることは少ない。

## 2. 研究目的

本提案では、人生折れ線グラフを用いて長所や短所などをグループディスカッション形式で他己分析を行い、他者から見た長所や短所を基に再度自己分析するというものである。従来の自己分析に比べ自分の長所や短所のキーワードをより多く抽出でき、多く抽出することで自己理解が深まり自己PRの質が上がるのではないかと仮説を立てた。そこで本稿では自己分析に先駆け、複数人による他己分析を行う自己PR作成支援方法の有用性について検証した。

## 3. 検証実験

### 3.1. 実験方法

実験の目的は長所・短所のキーワード数を多く抽出することで自己理解を深め自己分析の質を向上させられるかどうかを検証することである。

大学3年生15名（男12女3）を対象に従来の自己分析と提案手法を以下の点において比較した。

- ・対象者の特徴を表すキーワード数
- ・対象者の長所と短所の抽出数
- ・模擬エントリーシートの採点結果

図1に示すように実験方法は以下の3段階で行われる。(1)個人ワークでは人生折れ線グラフを作成する。人生折れ線グラフとは今までの人生を折れ線グラフ化したものであり、縦軸は人生を振り返った時にどの程度幸福だったかを表し、横軸は年齢を表す。自分が何歳の時に各イベントが起こったかを記すことで人生のターニングポイントなどを分かりやすく他者に伝えることができる。人生折れ線グラフを用いて(2)プレゼンテーションを行いメンバーに自分について自己紹介をすることで実験対象者について理解を深めてもらう。(3)グループディスカッションでは(2)のプレゼンテーション・質疑応答により、実験対象者についての意見をメンバー同士で共有し、実験対象者以外のメンバーでプロフィール形式にまとめ実験対象者へアウトプットする。

### 3.2. 結果

図2に示すようにキーワード数と長所・短所の抽出数において、従来の自己分析よりも提案手法の方が多くのキーワードと長所・短所を抽出することができた。キーワード数に関しては提案手法の方が有意に多く抽出されたことが確認されたが、長所・短所の抽出数については、統計学的な有意差は認められなかった。

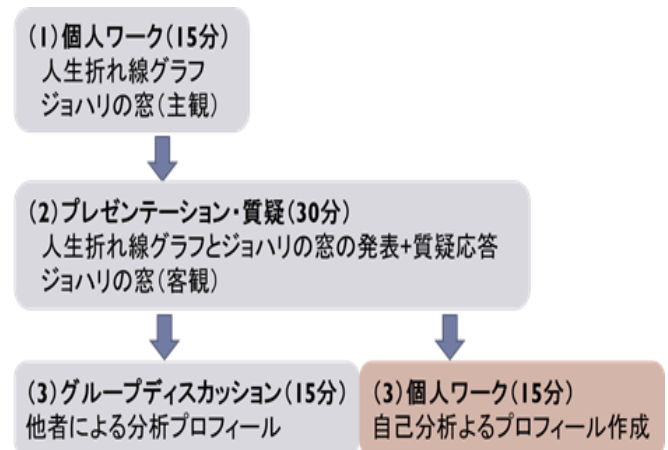


図1 実験フロー

Support program to present oneself by analysis of the self from others.

<sup>†</sup>MASANOBU TANAKA, <sup>‡</sup>RYOUTA NAKAMURA, <sup>†</sup>NORIYUKI KAMIBAYASHI,

<sup>†</sup>Tokyo University, <sup>‡</sup>Shohoku college,

模擬エントリーシートにおける自己PRの評価項目別平均点を図3に示す。評価項目別に見ると「客観性」、「独自性」においては従来の手法よりも提案手法による得点の方が高くなった。しかしながら統計学的な有意差は認められなかった(図3)。

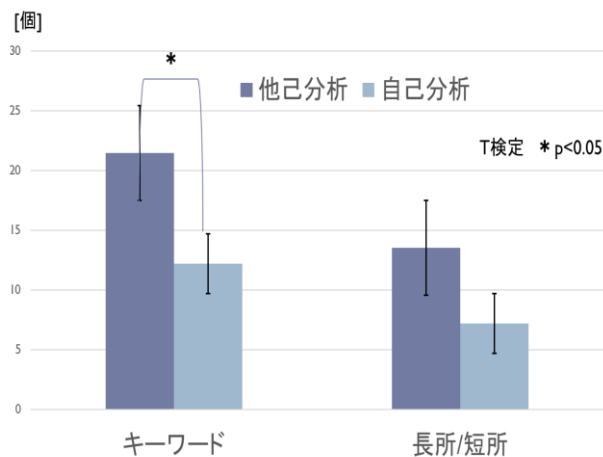


図2 対象者の特徴を表すキーワード数

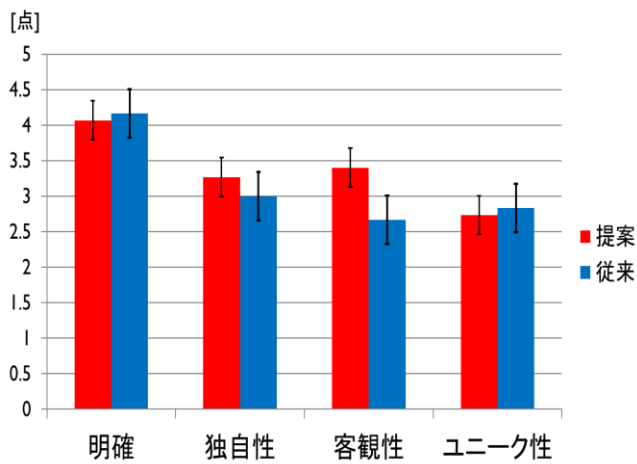


図3 模擬エントリーシートの採点結果

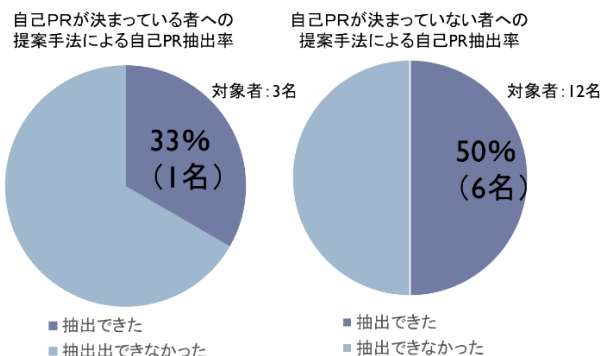


図4 提案手法によって抽出されたキーワードが実際に自己PR文に採用された割合

表1 アンケート結果

アンケート項目	評価(5段階)					評価平均
	1	2	3	4	5	
キーワード数の増加があった。	0人	1人	3人	5人	3人	3.8
新しい自分を見つけることが出来た。	0人	1人	2人	7人	2人	3.8
個性あるPRポイントが見つかった。	0人	3人	4人	4人	1人	3.25
人生を語るのには抵抗がなかった。	0人	2人	1人	3人	6人	3.7

### 2.3. 考察

実験協力者に対して実験前に既にアピールポイントを自分で決めることができているかについて事前アンケートを行った結果、できていると答えた者が3名、できていないと答えた者が12名であった。

事前アンケートによりアピールポイントを自分で決められた者と決められていない者に対して検証実験を行い、どちらの者に対して自己PR支援として効果的かの確認を行った。結果は自己PRが決まっていると答えた実験協力者の内33%の者が提案手法によって新たに抽出されたキーワードを使用して自己PR文を作成し、できていないと答えた者においては50%の者が提案手法により抽出されたキーワードを使用して自己PR文を作成した。これにより、自己理解が進んでいない者を実施した方が高い効果が見込める傾向があることがわかった(図4)。

表1のアンケートの項目に対する評価方法は(1=当てはまらない, 2=やや当てはまらない, 3=どちらでもない, 4=やや当てはまる, 5=当てはまる)となっている。アンケート結果ではキーワード数の増加と新しい自分の発見に対しては当てはまると答えた者が多かったが、個性あるPRポイントの発見は半々となり、もともと自己PRが決まっている者と合わせると60%の者が問題を解決できることとなった。あまり、親密でない者に自分の人生を語るに抵抗がなかったかの質問にはほとんどの者がなかったと回答した(表1)。

### 3. おわりに

提案手法により、他己分析が行われないという問題点は解決し、キーワード数の増加による自己PRの質の向上については結果として数値的な有意を見出すことができなかったが自己PR文の評価項目である「客観性」については能力向上の兆しが示唆された。

#### ・参考文献

1, 人生折れ線グラフ

<http://www.hitachi-solutions.co.jp/column/careerplan/vol3/>

(2015年12月23日 アクセス)